



# コルネリオ会

(キリスト者自衛隊員の会)

ニュースレター No.53

1988年2月

## 主イエスは生きておられる

クリスマスが終るとつぎはイースターがやって来る。聖書によれば主イエスは死人の中から復活されて、その後天に昇られたとある。

そしてこれが福音メッセージの後半をなしている。(Iコリ15章14節) 我々はユダヤ人ではなく日本人なので主の復活昇天についても何か遠い所で起った事のようにあまり実感がわいてこないかも知れない。しかし主の昇天の現象が起ったのは地球上で只1回だけ中東イスラエルの地に於てであった。その時主は天に昇るにつれてだんだんエルサレムの地から距離が遠くなって終に見えなくなった事であろう。それから2千年近くの間主イエスは変ることなく父なる神の右の座についておられるとすればその位置はどこからでもほぼ等距離という事で、その点我々異邦人もイスラエルの人達と同等と言えるであろう。

近年経済発展と円高のため日本人の海外旅行は容易となり、割合気楽に主イエスの昇天されたエルサレムの地点まで行くことが出来る。しかしそれは2千年前の主の昇天の状況をしのぶため、現存する主イエスを仰ぐためには旅行の必要はない。主はイスラエルの上空におられると同様日本の上空にもおられるので、主を仰ぐためにはエルサレムの昇天教会まで行かなくても東京で明治神宮の森に於てでも十分そのご臨在に接することが出来る。

日本人とユダヤ人の一番大きな違いは何かと言われたらユダヤ人は選民だが日本人は異邦人だという事ではなからうか。日本にも今や数多くの信仰の厚いクリスチャンが居られる事ではあるが、

しかしその先祖は皆主を信じていなかった。我々が敬愛するローマ軍人コルネリオ(使10章)もアブラハム、イサク、ヤコブのような主を信ずる先祖は持っていなかった。しかし彼は主を仰ぎ見るや家族一同を集めて主に心を向けるにやぶさかではなかった。我々にもその事は言えるであろう。我々が尊敬し慕っている先祖はどのような生き方をした方であったとしても、若し我々国民が復活の主イエスキリストを信ずるならば日本国内どこでも一族集まって誠の主を仰ぐことが出来る。このようにして天地の創造者であり今も生きておられる主イエスを讃美する国民となる事が理想であろう。

数年前たまたま米国サンディゴでイースターを迎えた事があった。その時の1,000人教会でのイースター前夜祭での状況は忘れられない。聖歌と復活詩とで編まれた40分間の聖会は2千年前のイスラエルを思い出すというよりは現存する主イエスへのさんびであり待望であった。主は生きておられる。復活とは何か、神の力がどう働いているのか、現在の科学では解明不能な最大なものの一つであろう。しかし科学をそして真理を支配するのは人ではなく天地を創造された神である。聖書によれば復活の主は戸を開けずに弟子達の集まっている所においてになったという。これはどういう事か、現存する人間の間ではこのような例を見ることは出来ない。生科学が如何に進んでも現在の人間の知識ではまだまだそこまでは届きそうもない。しかしこのような同じ復活の事実は今まではないが、将来世の終りの時には起るといふ。どの

ようになるのか、使徒パウロは言う「愚かな人よ、もしキリストがよみがえらなかつたとすれば我々は最もあわれな人間になる」(Ⅰコリント15章)パウロはこの章の中で「もし」を8回くり返して使っている。パウロも昇天前のイエスには会っておられないのだから「もし」という事になったのだと思うが、その点は私達も同様である。そしてそれを信じられないのは愚かな事であるという。ある人達は仲々信じられないであろう。しかしその人達を笑う事は出来ない。それと同時に自分自身の信仰をかえり見なければならぬ、そしてこの復活と昇天と現在もなお生きておられる臨在を信じる事が出来た時、福音メッセージの前半である十字架のしょく罪とイエスの血による清めの意味がはっきり理解出来るのではなからうか。我々人間の罪をゆるし神の国に引上げるために主イエスは今も我々を見守り、とりなして下さるのである。十字架の言は滅び行く者には愚かであるが、救いにあずかるわたくしたちには神の力である。(Ⅰコリ1章18節)

### コルネリオ会秋の修養会報告

1987年秋の修養会は次記のように行なわれた。

目的 信仰の交わりを深める。

期間 1987.11.7(土)～8(日)

場所 静岡県伊東市宇佐美1746-1 中島荘

参加者：今井健次、矢田部稔、和子夫人、中野正治、石川信隆、小山田光成、滝原博、山田伊智郎、武宮啓夫、坂本登利男、孝子夫人、聖子(6才) 恵(4才) 各兄弟、(13名)

#### 時程及び担当

曜	時 間	内 容	担 当
土	16:00～17:00	話し合い	司会(石川信隆) 発題(中野正治)
	17:00～18:00	訪米報告	報告(今井健次)
	18:00～19:00	食 事	司会(武宮啓夫)
	19:00～20:00	聖書研究	司会(小山田光成)
日	07:30～08:30	祈 禱 会	司会(滝原博) 奨励(山田伊智郎)
	08:30～09:30	食 事	司会(矢田部和子)
	09:30～10:30	礼 拝	司会(坂本登利男) 奨励(矢田部稔)
	10:30～11:30	散 歩	案内(山田伊智郎)
	11:30～12:00	食 事	司会(坂本孝子)

#### ●聖日礼拝での奨励 (矢田部稔)

(ルカ22章54～62節) ペテロの信仰のぎりぎりの場面を示しているの、この箇所をとおして忠誠心について問われる。この事が起る前には19章のイエスのエルサレム入場から始まる一連の事柄がある。しゅろの日曜日、宮清め、夜は山での祈り、木曜日には捕えられ、ヘロデヤカヤパの中庭での事があり、それから主を三度否定することになる。誠の忠誠心とは人の思いだけで構成されるものでなく、その弱さややぶれを通して完成された時始めて御栄光をあらわすものとなる事を教えられた。

#### ●証詞・話し合いの抜粋

中野正治

昭40年から航空自衛隊救難部隊でヘリコプター捜索機の操縦をしてきた。沖縄配属の時4年間米国軍人と接触し、その信仰生活に興味を持ち救われてクリスチャンになった。それから10年余りになるが、近頃少したるんで来ている事を反省している。伝道、信仰の生活が少し希薄になりそうなので、このような場で活性化をはかる必要があると思う。現在空幕調査一課に勤務している。あまり明るい仕事ではないが、現在の仕事を通してもそれと同じような状況が教えられ励みとなっている(内容略)。

今井健次

この話は宣教と比較すると面白い。クリスチャンは選ばれた人であり、米国でも本当に信仰に立っている人は少いようだ。アメリカの社会を見た時どこに神の国があるかと思われる。今の話でソ連についても同じようなことで、硬い国だと思っていたが内容は案外という事もあるようだ。日本の共産党もだらけているとすれば日本のクリスチャンはどうであろうか。

山田伊智郎

キリスト教は長期停滞のようだが、これからの背景は明るいのではないか、今は何でも合理化されてインスタントばやりだが最近手作りのものはやって来た。これは本質的なものを求める思いがもどって来ているのではなからうか。企業でもより所を求めている人が多く、そのような選び方

になって来ていると思う。新興宗教も盛んではあるがキリスト教でも根本的な所を求めるべきで、その追求をしてくればキリスト教は楽しいものだという方向に行くのではないかと、ただきびしい戒律を求めていくのではないと思う。

滝原 博

あまり真剣に考える事はしない。娘が大学で老人福祉に興味を持って来た。60歳、70歳の人を対象に今奉仕して歩いている。しかもそれで最終的には喜んでいて、近頃は世の中も変わって来たので色々な事が対象になる。先入観にとらわれる事ではなく、その中から活性化をはかっていけば良いので教会生活でも伝道でもその中から考える。福音は一度聞かせたらあとは知らないというのではなく、も一度振り返って神の声を聞かせる姿勢が大切ではないか。

小山田光成

こんな話がある。あるお婆さんが愚痴を言っていた。それはつぎの三つで、(1)は馬鹿、(2)はあっちへ行け、(3)は死んでしまえ、であった。これは生存を確保するのに必要な三つの条件で、(1)は相手が悪いということ、(2)は侵入者に出て行けという事、(3)は出て行かない時、となる。これは人間の本性で自分が限界で生きようとする時そうなる。国家間でも同じような事が起る。大韓航空機墜落の場合がこれに当るのではないか。クリスチャンは神のゆるしと愛の中でこの三つを静めなくてはならない。人間の原始姿勢は地獄に投込まれなければならない。又テレビで、あるタレントが面白い事を言っていた。丸テーブルの真中に料理が置いてあって長い箸がおいてある場合、地獄では我先に食べようとするが他人を蹴落してもと思うが誰も食べられない。しかし天国では自分は食べられなくても他の人に食べさせる事は出来る。自分を愛するように隣人を愛せよという事になる。

山田伊智郎

しばらく研究の業務に従事しているが、研究というのは締切が3月末というのでその間切迫感が少ない。つつい明日にたよる傾向がある。イエスはそれをマタイ6章34節でたしなめておられるのだと思う。マルタとマリヤの話にしてもイエスはマルタに時の大切な事を説いているので今の時を

のがしてはいけないという事であろう。福音のすばらしさは認めるが、それは今日でなく明日信じても間に合うというのが悪魔の言い分である。

### ブラジル伝道旅行を終って

コルネリオ会員、元中央病院勤務、現東京基督教伝道館副牧師の下桑谷浩師がブラジル伝道旅行を終って帰国されたので1月の定期集会にその報告をして頂いた。その要点をお知らせする。

旅行はブラジル日系人教会、および国情視察を目的として、サンパウロ、リオデジャネイロ、サルバドール、ベレン、マナウス、ブラジリアを回りイグアスの滝まで行き、その間聖公会、ホーリネス、メソジスト、ホサナ、アライアンス等の教会を回って各所でみ言葉の奉仕をする事が出来た。サンパウロ周辺でも600km位の行動範囲があるので夜行バスで行って朝礼拝をして再び夜行バスで移動するという状態で体力が必要である。また、無牧の教会が多く集会のため人を集めると言っても電話もないので各家を自動車で回って知らせるという状態なので、日本で考えるような予定の行動は仲々うまくいかない。一世二世の人達が対象となり、若い人達とは疎外されやすい。しかし集会に集まるのは家族単位の事が多く、個人伝道というよりも家族が同時に入信しやすい。しかし無牧に近いのでその信仰を維持するのが問題となる。従って信徒伝道者に頼ることとなり、又教会が地域に深くかかわっているので生活上の行事を重視する必要があり、結婚式、葬式その他新築の時とか誕生パーティーにもメッセージを頼まれる。信仰を持っている人は特に真剣で、行事を通して多くの家族が救われている所もある。ブラジルの町はカトリック教会を中心に発展して来たのでカトリックは多いが新しい所や日本人の多い所にはプロテスタントの教会が待望されている。治安は良くなく貧富の差が大きいので、貧しい人は富んでいる人から奪う事に罪悪感が少ない。しかし物資は多く人々は底抜けに明るくて人種差別はない。果物等の食料は豊富で、人民は貧しくとも生きることだけは出来る。日本人の努力は今や実って、社会的地位は高い。ブラジルは広いので何事もあせってはいけないと言われるので、予定が狂うの

は一向に平気で、日本から先生が来るというと、農作業等は後回しにして集会に集まる。収穫はなくとも神の祝福があればよいという信仰を持っている。ブラジル伝道には問題もあるが、マケドニヤの民の叫びが聞こえるように思った。しかし伝道をするにはポルトガル語は是非必要だし、子供の教育の問題等があり、日本からの宣教師は単身赴任の人も多いように思われた。それから牧師夫人の役目は広範囲であり、その重荷は大きいように思われた。(文責 今井)

### コルネリオ会集会報告

#### 1. 12月定期集会

日時 62. 12. 12(土) 14:00 ~ 16:00

場所 東京市ヶ谷 矢田部稔兄宅

実施事項

聖研「エペテロ1章1~9節, 2章18~25節」

担当 今井健次兄

出席者

矢田部稔, 石川信隆, 中野正治, 今井健次の諸兄

#### 2. 1988年1月定期集会

日時 63. 1. 9(土) 14:00~16:00

場所 東京新宿 長橋和彦兄宅

実施事項

ブラジル旅行報告

担当 下桑谷浩兄

出席者

矢田部稔, 中野正治, 滝口巖太郎, 下桑谷浩, 今井健次の諸兄

### トピックス

科学とは。

聖書の無誤性は科学的にも適用されるかという時、科学を実証可能な事柄と定義するならば聖書に記述された定常的でない事実または地上に痕跡を残していない事柄については説明出来ないのが当然であろう。しかし対象領域を広げて現在再現出来なくとも系統的な予見を許すならば科学の前途は無限に聖書の真理に近づくことが出来るのではないかと思われる。

### 会計報告

(62.5~62.12)

#### 収入

前回よりの繰越	1,043,937
献金	122,000
計	1,165,937

#### 支出

ニュースレター	85,000
通信費	45,000
集会費	23,030
ソングブック	8,000
次回へ繰越	1,004,447
計	1,165,937

繰越金のうち¥800,000は定額貯金

#### ●献金者氏名 (62.5~62.10 順不同, 敬称略)

矢田部稔, 今井健次, 望月錦吾, 谷岡博志, 斎藤良一, 鮎川英男, 中野研精, 峯崎康忠, 長尾有二, 足立順二郎, 藤田勝男, 宮下和之, 飯塚正実, 石川信隆, 今村和男, 中野正治, 岡村紀子, 安永 稔, 小森邦治, 武内哲史, 玉井佐源太, 武宮啓夫, 蔵谷三郎, 吉江誠一

(会計係 石川信隆記)

★ 転勤, 住所変更の場合はお知らせ下さい。

★ 原稿を募集します。論説, あかし, 御意見, 近況等お寄せ下さい。

コルネリオ会事務局(JOCU)  
東京都東村山市富士見町2-12-34  
TEL 0423-93-6902  
郵便振替 東京 3-87577  
(発行責任者 今井健次)